

<今日の説教のポイント 創世記 12 章 1-7 節>

①信仰は神の語りかけから始まる 1 節

聖書の語る信仰を問題とする時、アブラハムは「信仰の父祖」として忘れることはできない。「主はアブラムに言われた」と突然彼に語られる。信仰はこの神の語りかけから始まる。「信仰は聞くことにより、キリストの言葉を聴くことから始まる」(ローマ 10:17)。また、「あなたは生まれ故郷、父の家から離れて、わたしが示す地に行きなさい。」との命令。現状からの決別なしに、新しい出発はない。わたしどもに、神は、今の場所、今の自分からの決別を求める。そして、「わたしの示す地に行け」と。み言葉がわたしどもを押し出すのである。

②約束と旅立ち 2-4 節

旅立ちを促す神の命令に神の約束が加えられる。アブラハムが「大いなる国民とされ」「祝福され」「祝福の源となる」との約束。神の祝福はアブラハムを媒介にして諸国民に広がる。それが彼の使命である。神の祝福や選びは、特権ではなく使命。使命とは、自分の命を何のために使うかの問題。他者と“共に”、“ために”、“間で”生きることが使命。それは、教会の使命となる。アブラハムの胸中は察するに余りある。しかし、彼は「信仰によって、…行く先も知らずに出発した」(ヘブライ 11:8)。主によって整えられている道と確信して旅立つ。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」(ヘブライ 11:1)。主観的ではなく「神によって望まれている事柄・・・」と理解する。

③すべてを委ねる信仰 5-7 節

神の約束の地はカナン人が定住 (6 節)。アブラハムは定住するが、土地を所有できない。神の約束の実現はどうかとの疑い。アブラハム危機に直面。神が現れて「あなたの子孫にこの土地は与える」(7 節)と再確認。自分が信じようとする努力は限界あり。信じられていることに気づくことは発見。その発見は神から与えられるもの。祭壇を築き、讚美と感謝の礼拝。アブラハムの発言なし。沈黙の中の服従。「・・・わたしが示す地に行け」と、今日のわたしどもに呼びかける。アブラハムは何人いてもよい。すべてをわたしに委ねる信仰に生きる、あなたの出発はいつ始まるか、まだなのか。主は待ち続けておられることを覚えない。